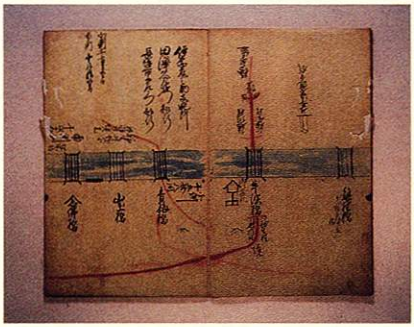
24 玉川上水の開削と新堀工事



上水路控　玉川上水取水口の羽村から四谷大木戸までの橋、分水、高札の設置場所などを記載している。表紙に天保13年(1842)写と書かれているが、原本については未詳(福生市　内出家所蔵)。

■多摩川の水を江戸の町へ

一六〇三年（慶長八）に徳川幕府が開かれて、江戸が日本の政治の中心地となると、江戸の人口は急激に増加した。三代将軍家光の時代に、参勤交代（さんきんこうたい）の制度と大名の正妻嫡子の江戸在府の制度がつくられたことによって、全国二百数十の大名が、江戸に数か所ずつの屋敷を構え、多数の家臣を住まわせた。さらに幕府直参の家臣もほとんど江戸に居住したため、多くの武士階級が江戸に集まり、それらの消費を満たすために町人階級も集中するようになった。一八世紀の江戸の人口は百万人ないしそれに近い数字で、世界一の都市となっていた。

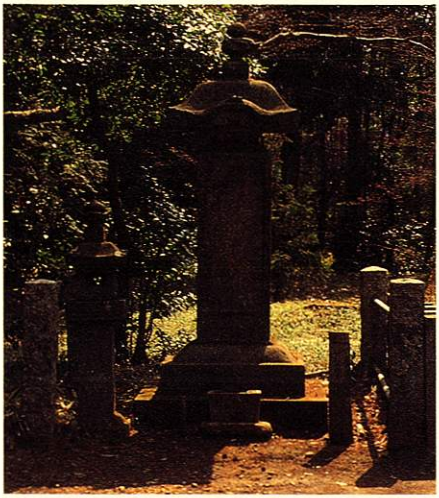
江戸の町の人口の急増により、飲料水はそれまでの神田上水と溜池から引いていた上水だけでは、当然不足することになり、新しい上水の開設が急がれていた。一六五二年（承応元）幕府は水道拡張計画を立て、それまでとはまったく別系統の、多摩川を水源とする水を江戸の上水とすることとした。幕府の資料である『公儀日記（こうぎにっき）』によれば、このような上水を考えて、幕府に工事を願い出たのは、麹町芝口の町人である庄右衛門・清右衛門の兄弟であった。幕府は一六五三年（承応二）にそれを許可し、工事費七五〇〇両を与えて幕府の請負工事として着手させた。兄弟は江戸市中の住人となっているが、江戸の住人で

は多摩川や武蔵野の地勢には明るくないだろうから、もとは多摩川付近の住人であったのかもしれない。

一説には、時の町奉行神尾備前守が大体の計画を立て、それを兄弟に請け負わせたともいわれている。また水を取り入れる場所を羽村とし、四谷大木戸まで露天掘りの上水を開削するという基本設計を考えたのは、川越藩主で老中であった松平伊豆守信綱の家臣安松金右衛門であったともいう。信綱はのちの玉川上水惣奉行でもあり、金右衛門は地勢水利にくわしかったとされるから、このほうが事実に近いようである。

『公儀日記』によれば、庄右衛門・清右衛門の兄弟は、金右衛門の設計なども参考にしながら、一六五三年（承応二）四月に掘削に着工し、翌年六月には四谷大木戸までの一〇里三〇町（四三キロ）に及ぶ玉川上水路の開削工事を完成させた。羽村の堰で取り入れられた水は、四谷大木戸まで流れたのである。つづいて江戸府内を虎ノ門まで掘り進め、これもとどこおりなく通水できた。

『上水記』（東京都水道局蔵）のなかの「玉川庄右衛門清右衛門の書付」では、下賜された工事資金は六〇〇〇両となっている。公式記録とは一五〇〇両の差があり、下賜金の六〇〇〇両は高井戸あたりまでで使い果たし、あとは自己資金三〇〇〇両で完成させたとなっている。



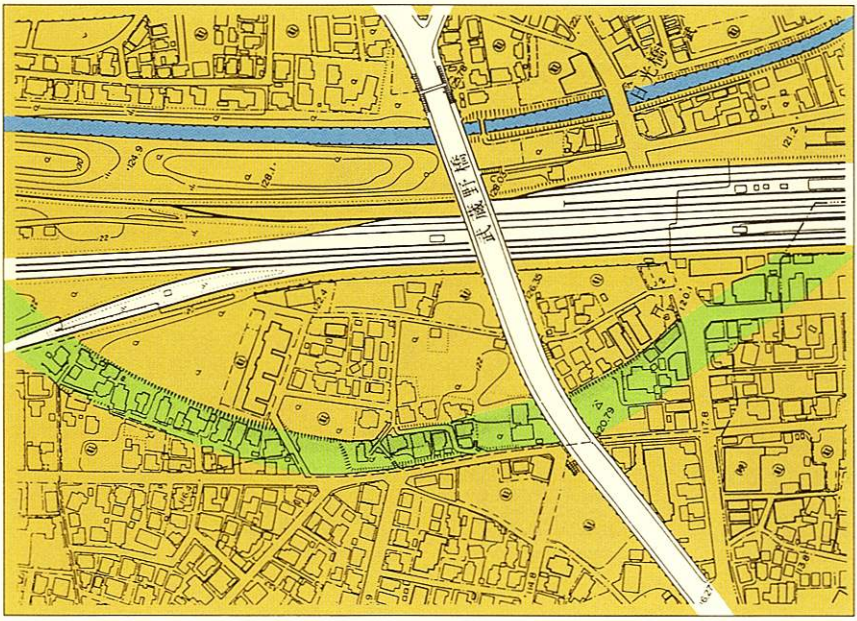
安松金右衛門の墓　昭和10年に安松家の菩提寺である新宿の太宗寺から金右衛門の墓石を平林寺に移す。安松金右衛門吉實は本国河内、生国播磨とし、1644年（正保元）に川越藩松平伊豆守信綱に召し出される。（埼玉県新座市　平林寺）

水喰土・玉川上水開削工事の跡　福生市指定史跡。

■「みずくらいど」という地名

江戸文芸の研究者三田村鳶魚（一八七〇年〈明治三〉～一九五二年〈昭和二十七〉）は、一九三二年（昭和七）八王子千人同心の小島文平によって書かれた『上水起元』を発見した。『上水起元』は上水完成から一四九年後の一八〇三年（享和三）老中松平伊豆守信明の諮問をうけて、水道奉行佐橋長門守佳如が千人同心の小島文平に委嘱して書かせたものである。文平の先祖善兵衛が、大庄屋として村人足をつれて承応の開削工事に参加したときの家伝や里俗の伝承をまとめており、玉川上水については工事の全般にわたっているが、そのなかで福生と深くかかわっている記述は、水喰土についてである。

『上水起元』によれば、玉川兄弟は最初、日野の渡しのそばの青柳村（国立市）から掘りはじめた。しかし府中八幡下のほうへ掘り進んだところで、高低差に見誤りがあったのか失敗し、福生村から水を引き入れることとした。四谷まで完成して水を流すと、熊川村の水喰土というところで、ことごとく地中に吸い込まれてしまった。そこで工事の惣奉行松平信綱は、安松金右衛門に命じて

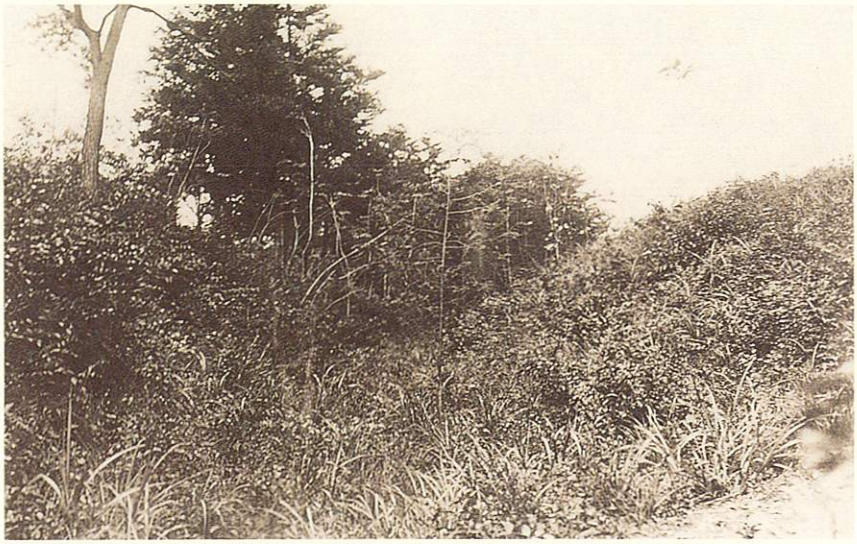


水喰土・玉川上水開削工事の跡位置図

測量をやりなおし、取水口を羽村にして、上水を完成させたという。玉川兄弟は二度失敗したために工事予算に狂いが生じ、高井戸あたりで六〇〇〇両を使い果たしたのであった。

熊川村の地名としての「みずくれぇど」については、地元の一部の古老のあいだで「みずくれぇど」のほかに「ほりけぇ」とよぶ地域があり、玉川上水掘替えと密接にかかわりのある地名であると思われる。熊川村の旗本長塩氏領の一六七六年（延宝四）の「水帳（みずちょう）」（検地帳）には「水喰土」「水喰戸」の二つの記述があり、田沢氏領の一七〇一年（元禄十四）の「高反別帳（たかたんべつちょう）」では「水喰戸」に統一されている。

また上水完成四年後の一六五八年（万治元）の熊川村の「帳ノうつし」には、「ほりかいち」の地名がみえ、地元で「ほりけぇ」とよんだところと思われるが、この資料では「みずくらいど」の地名は見当たらない。長塩氏領・田沢氏領の「水帳」「高反別帳」にある「水喰所」「水喰戸」の地積の合計は六町歩を超える。延長約一キロに及ぶ掘替えを余儀なくされた古堀筋



昭和初期の水喰土・玉川上水開削工事の跡　八王子在住の郷土史家・天野佐一郎氏を写真提供者・町田政吉氏が案内して撮影したもの。

に、一部新たな掘割工事に従事させられた村民の苦難の思いが「みずくれえど」の俗称となり、やがて地名として定着する過程で、一帯の広い地域の地名となったと考えられる。

古上水堀は、五丁橋下流一〇〇メートルから始まり、途中青梅線、五日市線に分断され、立川段丘に沿って進み、国道一六号線武蔵野陸橋手前で東よりに曲がり、旧日光街道稲荷社脇に達する。ここから先は、拝島駅北側を横切って、現水路の拝島分水口（平和橋下）に接続する。約一キロのうち水喰土公園内の四〇メートルと青梅線五日市線のあいだの約六〇メートルの堀跡は、おおかた原型をとどめている。拝島駅北側を横断した先にも古堀らしき窪地が約三〇メートルほど残っていたが、現在は拝島駅東口広場内に組み込まれている。

『上水起元』の「水、地面に引きしずみ流れ」なかったみずくらい”現象は、導水勾配千分の一以下のゆるやかな水路が、透水力のきわめて大きい礫層を通ったために、大量の浸透水が下位の拝島面に流れ落ちたことにより、給水能力が激減したことをさしたものと考えられる。多摩川から取り入れた水が、全部ではないにしても、ここで消えた

新堀橋付近の玉川上水　新東京百景の一つ。

玉川上水旧堀跡　福生市指定史跡。

ために、水喰土という地名になって定着したものと思われる。

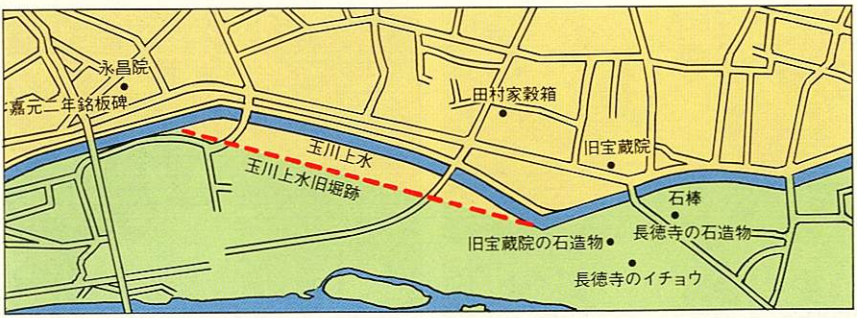
■元文五年の水路の掘替え

上水は完成から約九〇年後の一七四〇年（元文五）、洪水の被害を避けるために福生村先で新しい水路に掘り替えられた。掘り替えられたのは、現水路の宮本橋上流一〇〇メートル地点（水路が不自然に湾曲しているところ）から、新堀橋上流六〇メートル地点までの全長約六〇〇メートルである。

上水は羽村の取水口から一キロで福生市内に入り、約五キロを貫流して昭島市に入る。取水口から川崎村を経て福生村下までの約一・三キロの区間は、高さ一〇メートルを超える断崖を避けて、崖下の多摩川の河岸に沿って水路を通したため、開削以来洪水の際決壊の危険にさらされていた。元文五年の掘替えの対象となったのは、現在の市営競技場からコンクリート会社、カニ坂公園入り口付近に隣接する約三〇〇メートルの崖よりの堀筋である。多摩川本流との高低差は三・五から五・五メートルである。

工事はそれまでの水路より崖のほうへ三六メートルよったところに新しい堀を掘ることになり、工事予算は四〇〇〇両で、福生村の工事は普請金によってまかなわれた。普請金というのは幕府管理場所の土木建築の費用のことで、幕府の立替払いで工事費が支払われ、完成後江戸の上水利用者から工事費を取り立て幕府に返還した。

工事を担当したのは代官上坂安左衛門（うえさかやすざえもん）で、直接指揮をとったのは川崎平右衛



玉川上水旧堀跡位置図

門である。平右衛門は、多摩郡押立村（府中市）の名主であったが、同時にすぐれた農政家でもあった。また土木技術にも熟達していたところから、享保年間（一七一六～三五年）武蔵野の新田開発に登用され、一七五四年（宝暦四）には三万石の幕府領をあずかる代官となった人物である。

新堀開削工事は、工事予定線総延長六一〇メートルを三〇区画に分割し、それぞれの工区について請負制を敷いた。そのほとんどの工区で工期を二五日間とし、支払の方法は、一日に掘り出した土砂の量を検分して出来高の七割を即日払いとした。工事に携わったのは、武蔵野新田の開発を契機として形成された高度な土木技術をもつ集団に、下層農民たちが加わった集団であったとみられる。

その掘削土砂の総量は五万立方メートルをはるかに超え、工事は予算の四〇〇〇両をはるかに下回る工事費で完成した。翌年の一七四一年（元文六）二月十二日の記録では、残金の九二三両はその後の上水工事の準備金として町方に積み立てられたという。

このときの工事区域は、上流から馬喰竹・神屋敷・上内出の三つの集落にまたがっていた。ここに住む大部分の人たちは、工事によって移転を余儀なくされた。一部の人たちは三〇〇～四〇〇メートル離れた一段上位の段丘ぎわへ移転したが、大部分の人たちは新しい予定線をわずかに避けて、現在の奥多摩街道沿いへ移転した。